

## 復活節第5主日 5月15日 分かち合い

### ヨハネ 13-34

復活節第 5 主日には毎年、ヨハネ福音書から、最後の晩さんの席での主イエスの言葉が読まれます。主イエスは世を去るにあたって、弟子たちに向けて遺言のような長い説教をしました。その中で一貫して語られるのは「わたしは去っていくが何かが残る」という約束です。それは十字架と復活の後の弟子たち(私たちも含めて)にとっては、単なる将来への約束ではなく、自分たちの中ですでに今、実現している約束であるはずで

主イエスが世を去り、残るのは「愛の掟」です。「互いに愛し合いなさい」という言葉はヨハネ 15 章 12 節にもありますが、そこではこの掟が「わたしの掟」と呼ばれています。「善いサマリア人のたとえ」(ルカ 10 章 30-36 節)で見られるように、愛とは心から自然に沸き起こるものであるとするならば、愛が「掟」であるというはおかしいかもしれません。この「掟」は単なる命令や義務というよりも、むしろ生き方の根本原理だと言ったらよいのではないのでしょうか。これから弟子たちの生き方の中心になるのは「互いに愛し合う」ことなのだ、という大きな約束を主イエスは残してくださったのです。

「互いに愛し合う」のは決して簡単ではないでしょう。例えば、キリスト教共同体にとっても容易でない姿勢があるとすれば、それは、主の模範に従い、その恵みを受けて、しっかりと愛し合うこと、まさに愛するすべを知る姿勢に他なりません。特に意見の衝突、うぬぼれ、嫉妬、不和が、教会の美しい顔を汚すことがあります。キリスト者の共同体はキリストの愛のうちに生きるべきなのに、悪魔が「陰からちょっかいを出し」、ついつい互いに欺いてしまうこともあるのは事実です。

キリスト者であっても、愛するべきを一気に習得することはできません。ですから、毎日、新たに始めなければならないと思います。訓練しなければならないと思います。そうすれば、私たちが出会う兄弟姉妹に対する愛は深められ、限界や過ちから清められると思います。限界や過ちは、愛を一部分だけの、利己的な、不誠実なものにしてしまいます。私たちは自分の力で互いに愛し合うことが完全にできないと思います。だからこそ、主イエスから毎日、愛し方を学ぶ必要があります。毎日、主イエスを見つめなければならないのです。

私たちが愛し合うとき、私たちが主イエスの「弟子であることを、皆が知るようになる」(35 節)ということも大切です。私たちが主イエスの弟子であること(キリストが今も生きていて私たちを導いていてくださること)は、根本的に私たちキリスト信者の生き方をおして表されるのです。

ヨハネの第一の手紙にはこういう言葉もあります。「いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うならば、神は私たちの内にとどまってくださり、神の愛が私たちの内でまっとうされているのです」(4 章 12 節)。

どうか主イエスが私たちを愛して下さるような愛し方を日々学べるよう、ご自分の子にして主なる方の、完全な弟子である乙女マリアが助けてくださいますように、お祈り続けましょう。